

二四

しまつて、褐色の落葉がガサ／＼と冷たい風に泣いて居る。空を見ると雲さへ、急しげに北へ／＼と走つて冬が來たと告げてゐる様に思はれる。

夕暮の鐘が鳴つた。

柿の枯枝に友も無く止まつて居た鳥が、その音に驚いて當てもなく舞つて往く。熱い涙が理けもなく私の頬を傳つた。

私はやがて踵を返へして自分の部屋に歸つた。そして外を眺めた。

夜の景色は段々濃くなつて、表の鐘樓は次第に闇の中に消れてしまつた。どあなたの空に冷たい星が一つ薄く光つて居る。寒くなつて食ふものが無いのであらう、鼻の聲がする。

夜は更けて往く。障子の穴から吹き込む風に私は幾度襟元を掻き合せてたかわからない。

八時が鳴つた。棟を隔てゝ打つ、お引けの飯木の音が微かに聞えて来る……………。

雨後の秋

黒 數 學 勇

夜來の雨は晴れたる儘、二三の友を語らひて寺平の

畑道にと歩を運べば、秋をかこつ虫の音は、怨むが如く、悲む如く、草葉の露は冷々と衣の裾を潤して一步毎に哀を増せり。見渡す限り四方は一面濃霧に鎖さるゝとはいへ、或は現れ或は隠れ、變幻万狀一呼吸の中に新なり。既にして冷風吹き起れば、濃霧忽ちに散して、満山盡く是れ紅葉、『誠に身延山の栢は千早拂る神もめぐみを垂れ、天下りましますらん、心なきしづの男しづの女までも心を留むべし。哀を催す秋の暮には草の庵に露深く（中畧）峯の紅葉。何時しか色深くして、たへ／＼に傳ふ懸樋の水に影をうつせば、名にしおふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ』の聖文、いつしか口をついて誦しつゝあり。友を促がして歩を山麓に移せば、溪水秋に染みて紅なり。互に相顧みて盡ざる畫趣を賞す。

布教の心懸け

友 井 能 慈

吾人は佛弟子なり。佛弟子は佛祖の本意を受け、惡を止めて善を進め、權を實とする迷者をして實道に引入し、以つて天下萬民諸乘一佛乘の春を迎ふべき大責任あり。吾人は如何に心掛けて布教せば、皆歸妙法の春